第六回原水禁世界大会おわる

東京アピール採択

一万人結集した闘う大会

軍備全廃をめざす第六回原水爆禁止世界大会は、八月二日から九日まで、外国代表二十八ケ国十国際組織百二十八人と一万人の国内代表を集めて東京で開かれ、最終日「世界のあらゆる平和勢力の団結をかためて平和の敵との共同闘争を力強く進め、原水爆禁止と軍備全廃と平和共存への道を切り開こう」との〝東京アピール〟をはじめ「一般決議」「国際共同行動の勧告」をそれぞれ満場一致で採択した。また日本代表団の「決議」「原水爆禁止運動推進のための勧告」と北富士闘争支援、核ミサイル潜水艦撤去要求、沖縄問題、新島闘争支援の四つの特別決議も採択された。

大会は二、三、四日の予備会議（東条会館）と五日の一万キロ国民平和大行進の到着につづいて六日から本会議に入った。まず第一日は午後から都体育館で本会議を開き、「いまこそ平和の敵を明確にして闘いを強化しよう」との安井日本原水協理事長の一般報告と(1)軍備・平和共存への原水爆禁止運動の課題(2)日本における新安保・軍国主義体制の強化と原水爆禁止運動の課題(3)移民送出・軍事同盟と国民生活関係（以上平野義太郎原水協代表委員）(4)原水爆禁止運動被爆者救援運動の教訓と今後の方向（門司信吉総評副議長）の基調報告、被爆者、沖縄などの特別報告、外国代表演説などが行なわれた。

大会は午後一時四十分、野坂参三議長の「原水爆許すまじ」の大合唱、原水爆犠牲者への黙とうにつづいてインドネシアのマルタロガワ氏ら外国代表三十一人、吉田司鉄労組委員長ら国内代表三十八人を議長団に選出した。外国代表の紹介につづいて中国代表団在期間延長要求決議（風見章氏）朝鮮代表入国禁諸決議（畑中政春氏）の二つの緊急動議が提出され、いずれも満場一致で可決。安井原水協理事長が一般報告に立ち「この大会を〝たたかう大会〟にしよう」と力強く訴えたあと、二階後方中央口から平和行進団が入場、会場はふたたびわれるような拍手につつまれた。

予備会議報告（早川原水協常任理事）のあと外国代表演説に入り、ユーレン氏（オーストラリア）劉寧一氏（中国）コルバーク女史（西ドイツ）ケリー氏（アメリカ）ベンチュレリ氏（チリ）ブルガコフ氏（ソ連）ケイル氏（スーダン）の七人がつぎつぎと演壇に立った。外国代表はいずれも、最近国際緊張を激化させようとしているアメリカをはじめとした西側諸国の戦争挑発政策や植民地主義を激しく非難するとともに、軍備全廃・平和共存こそ世界の平和を保障する唯一の道であり、平和を求める人類の願いは必ず勝利するだろうと訴えた。また各代表とも日本人民の安保反対闘争に心からの賛辞をおくったが、中でも劉寧一氏は「アメリカ帝国主義は中日人民共通の敵である。中国人民は日本人民の闘いは自分たちの闘いであり日本人民の勝利は自分たちの勝利だと考えている」とのべ、日中両国人民の連帯を訴えた。

さらにメッセージ、祝電紹介（海外百八十八通、国内二十二通）幾沼社会党委員長、野坂共産党議長のあいさつがあり、原水協代表委員平野義太郎氏、総評副議長門間信吉氏によって四つの特別報告が行なわれた。

また平和行進団の紹介、報告に満場が拍手で労をねぎらったのにつづいて特別報告に入ったが、長崎原爆青年乙女の会の山口仙二さんが「原水爆禁止こそ被爆者を救う道です」と訴えたとき、中国代表が壇上に上って中国からの慰問金十万元（約千五百万円）を渡すと広島と長崎への原爆投下十五周年にあたり、一万人の代表が、世界のあらゆる大陸と、日本全国の町々村々から、軍備全廃をめざす第六回原水爆禁止世界大会に出席するため、東京に集まった。

海外からの代表は、日本の原水爆禁止運動にたいし、とくに最近の新日米安全保障条約に反対する闘争にたいし、それが世界の平和に大きな貢献をしていることをみとめ、これに熱烈な支持をよせつつ、大会に参加した。

この大会において、全世界と日本の平和勢力のあいだに、運動の経験の交流がおこなわれ、すべての国民の闘争は、同じ目的をもつ共同の闘争であることが確認された。こうして大会は、「闘争から世界大会」であると同時に、平和勢力を大きく結集する場であることが実証された。

異なる社会体制をもつ諸国の平和共存を実現し、侵略と戦争に反対するために世界諸国民は、ますます強く原水爆禁止・軍備全廃と軍事同盟条約および外国軍事基地の撤廃を要求している。

世界諸国民のこれらの要求は、これを拒否するアメリカその他の帝国主義・植民地主義勢力との断固たる闘争によって実現されなければならないし、またかならず実現されるのである。

戦争勢力とのこの闘争は、いま世界各国で進められている。

われわれは、いま、人類史上かつてない、被圧迫民族と人民の解放の時代の中に生きている。この偉大な事業のなかで、平和運動と民族独立運動は、固い連帯のもとに進められている。

原水爆禁止運動によって、世界平和に貢献してきた日本国民は、新日米安全保障条約に反対する闘争において、大きな成果をおさめた。極東の軍事同盟機構を強化しようとする日米戦争勢力の計画は大きな打撃をこうむった。

日本国民は、さらにその闘争を前進させ、軍事基地のない平和中立日本をうちたてることに、かならず成功するであろう。

日本国民のこの運動は、一面において、世界的な原水爆禁止・軍備全廃のための運動と結びつき、他面において、アジア・アフリカおよびラテン・アメリカの民族独立運動と結びついている。日本国民の運動と世界諸国民の運動とのこのような緊密な連帯は、きわめて重要な意義をもっている。

日本国民のこの闘争の前進は、世界の平和愛好国民の勝利をめざすものである。他の国々の平和勢力は、日本国民の偉大な闘争によって鼓舞激励された。

このような平和勢力の発展によって追いつめられ、孤立化した戦争勢力は、いま必死の反撃をくわだてており、戦争の危機はいまだ去っていない。

いまこそ、世界の平和勢力は、平和の敵である戦争勢力を完全に圧倒するために、かたく団結して闘争をさらに強化しなければならない。

この闘争を効果的に進めるためには、平和の敵を明確にして闘うことが必要である。帝国主義的・植民地主義的政策をとる勢力や、侵略的な軍事同盟・軍事基地政策をとる勢力などは、すべて平和の敵である。

世界のあらゆる平和勢力の団結をかためて、平和の敵との共同闘争を力強く進めよう。そして、原水爆禁止と軍備全廃と平和共存への道を切りひらき、核戦争の脅威を根絶しよう。

世界諸国民の力は、必らずそれを実現するであろう。

戦争勢力との歴史的な闘争を進めつつある日本の首都東京から、われわれは、これを世界諸国民に訴える。

一九六〇年八月九日

軍備全廃をめざす
第六回原水爆禁止世界大会

明確になった平和の敵

安保闘争を反映した第六回原水禁大会

第六回原水爆禁止世界大会は、過去五回の大会が一段一段階段をふみしめてきたとすれば、一ぺんに数段をかけ上った、ともいえる大きな前進を示した。現在の時点で世界の平和を犯そうとしているものはだれであるかを基本的に明らかにさせることができたからである。「東京アピール」は、「闘争を効果的に進めるためには、平和の敵を明確にして闘うことが必要である」といい、「帝国主義的・植民地主義的政策をとる勢力や侵略的軍事同盟・軍事基地政策をとる勢力などはすべて平和の敵である」と規定した。

この規定が生まれたのは、観念的な論議によってではない。U2スパイ機による首脳会談の破壊、RB27機事件や日米新安保その他の軍事同盟政策、核ミサイル基地強化などアメリカを中心とした戦争政策が最近とみにロコツになって諸国民の目にはっきり見えはじめたためであり、さらには世界の平和勢力の発展によったものである。それはことに「歴史的大闘争に発展した安保闘争と、日本全国のすべての軍事基地をなくして展開された平和大行進の巨大な行動によって支えられた」（日本代表団決議）。世界大会が一ぺんに数段をかけ上ったということは、運動の〝ハネ上り〟を意味するものではなく、安保闘争を通じて日本国民の平和・民主主義・中立をめざす運動全体が安保闘争を通じて飛躍的に前進したことの反映とみるべきだろう。

安保闘争の成果は、日本代表の確信となって世界大会の成功を支えただけでなく、外国代表の増強を呼んで、この面からも大会の実りを豊かなものにした。オーストラリアの二十人にのぼる代表団をはじめ各国代表とも日本の闘争を真剣に学び、日本国民を激励しようという熱意にあふれていた。西ドイツの代表などは、「あなた方の闘いがわれわれに与えた影響はあなた方の想像よりはるかに大きいものだ」と、直接ことばの通じないのがもどかしげでさえあった。日本の安保闘争はこうして世界的に高く評価され、それは「まさに世界的規模において進められている平和と独立のための闘争の一環であることが確認された」（一般決議）。

一方、「敵を明確にする」ことによって運動の幅をせまくしないかという疑問や不安はもちろん全くないわけではなく、大会討議の中でも出された。だが、敵を明らかにすることは、反面味方を明らかにすることである。国際的には、平和勢力とは「アジア・アフリカ・ラテンアメリカの民族解放と民主・自由をめざす力、社会主義国家の強大な平和を守る力、資本主義国家の民主と平和を目ざす広範な運動」であることを明らかにし、それらの間の連帯を強化することができた。国内的にみても、分裂政策などによる権力からの圧迫干渉が大きくなっている（益谷自民党幹事長の大会ひぼう談話や民社党、金労などによる第二原水協結成の動きなど）にもかかわらず、運動は拡大、前進していることを大会は示した。東京・富山その他の代表団には自民党議員がふくまれており、金労盟下の組合からも参加した。また高校生など新しい層の参加が目立った。「安保闘争がはじめて私をこの大会に参加させた」という香川県のある代表のことばもその一例だろう。もちろん「戦争勢力の正体を、真に大衆のものにする日常の行動」（原水爆禁止運動推進のための勧告）がない限り運動の発展を保障することはできないし、ことに農漁村地帯への浸透が運動発展の大きな条件になっていることも指摘された「平和は待っていては来ない。たたかいとらねばならぬ」と「原水爆禁止運動推進のための勧告」は訴えている。大会の宣言、決議がどこまで生かされるかは、分散会でも多くの発言があったように、日本の平和運動の重要な部分である原水爆禁止運動を〝夏の大会〟だけにせず、職場の組織を確立し日常運動として闘えるかどうかにかかっているといえよう。

〝父を返せ、母を返せ〟

被爆者を囲むこん談会　遺児の作文に泣く

世界大会本会議三日目の八日夜、被爆者を囲む懇談会が東京・千代田公会堂で開かれたが、一昨年被爆者の父を失なった山口市大殿小学校五年生中野吉正君（一〇）の「父を返せ、母を返せと叫ばずにはいられない世界をつくってください」と読みあげたつづり方が参加者の胸をつまらせた。

中野君のお父さんは「広島で被爆し、死んだものと思っていたら、一週間ほどして傷口にウジをわかし、へんな臭いをさせて帰ってきた」。しかしその後は傷ついた体にムチうって働き、吉正君と妹が生まれた。貧しいながらも楽しい家庭だったという。それが一昨年の春ごろから発病してついに帰らぬ人となった。吉正君は「ぼくは町で父子づれの人をみると、戦争さえなかったらぼくもあのようにお父さんと歩けるのにと悲しくなります」と訴え、「もう戦争はやめてください。父を返せ、母を返せと叫ばずにすむ世界をつくってください」とけなげに叫んだ。

【大会スナップ】

外国代表に関心集まる

○…国内代表の関心の一つは何といっても外国代表。二階の外国代表席で紹介が始まったとき、真上の三階席が騒然となった。「外国代表の顔が見えない」というのだ。この正当な要求は入れられ、いったん紹介が終ったあと外国代表は壇上に連れ出されて紹介のやり直し。満場は前にも増す拍手で歓迎。外国代表も贈られた千羽鶴のレイを首にかけ両手をふって答えた。

○…国は二つに割れても、平和の願いは一つ――東西両ドイツ代表団の団結ぶりはみごとだった。予備会議では東ドイツ代表が通訳をかって出たが、本会議でも東ドイツ代表が紹介されたとき、西ドイツ代表がかけよって東ドイツ代表に千羽鶴のレイをかけてやり、満場の盛んな拍手をあびた。

○…第一日の本会議は予定時間が二時間近くも延び、会場もいささか疲れ気味になったので、演説する外国代表はいずれも懸命の聴衆吸引策。西ドイツのユルバーグ女史が「ドイツトニツポンリヨウコクミンノユウコウバンザイ」と日本語で叫んでやんやのかっさいをあびれば、アメリカのケイル氏は「三時間でお疲れなら三カ月歩きつづけた平和行進の人びとのことを考えて下さい」とはげまし、爆笑をかった。